

オゾン層・紫外線の年のまとめ(2014年)

オゾン層・紫外線の年のまとめ(2014年)の主な内容は以下のとおりです。

【オゾン層の状況】

世界のオゾン層

- ・世界のオゾン全量は1980年代から1990年代前半にかけて大きく減少した。その後、1990年代半ば以降はほぼ変化がないかわずかに増加傾向となっているものの、現在も少ない状態が続いている(本文 P.16)。

日本上空のオゾン層

- ・2014年の日本上空の月平均オゾン全量は、那覇で年の初めと終わりに1994～2008年の平均値より多く、12月にはその月として観測開始(1975年)以来最大となった。札幌とつくばでは全般に平均値に近かった(本文 P.11)。
- ・国内のオゾン全量の経年変化をみると、札幌とつくばのオゾン全量は、1980年代から1990年代半ばまで減少した後、緩やかな増加傾向がみられる。札幌における最近5年間の平均値は1970～1980年平均値と比べて少ない状況にあり、オゾン層破壊が進む前のレベルには回復していない。一方、那覇と南鳥島では期間を通して緩やかな増加傾向が見られる(本文 P.26)。

南極オゾンホール

- ・2014年の南極オゾンホールの面積は10月1日に最大(2,340万km²)となり、過去10年間の平均値(2,460万km²)と同程度だった(本文 P.5)。
- ・昭和基地のオゾンゾンデ観測によって得られた、高度12～20kmにおける10月のオゾン量をみると、1980年代から1990年代半ばにかけて急激に減少しており、近年のオゾン量は1970年代と比較して半分以下の状態が続いている(本文 P.21)。

【紫外線の状況】

国内の紫外線

- ・2014年の国内の紅斑紫外線量(波長によって異なる人体(皮膚)への影響を考慮して算出した紫外線量)をみると、札幌とつくばでは春に1994～2008年の平均値を上回り、札幌の4月とつくばの5月にそれぞれその月として観測開始以来2位となった。那覇では、1月と7月にそれぞれの月として観測開始以来最大となった(本文 P.13)。
- ・国内の紅斑紫外線量の経年変化をみると、札幌とつくばでは、観測を開始した1990年代初め以降増加しており、増加率はそれぞれ10年あたり4.3%、5.4%で統計的に有意である(信頼区間95%)。那覇では、1990年代に増加した後、2000年代は変化傾向がみられない(本文 P.30)。